

# 公演日程

## A program

第1589回 NHKホール  
2/10[土] 開演 6:00pm  
2/11[日・祝] 開演 3:00pm

The 1589th Subscription Concert  
on 10th (Sat.) & 11th (Sun.) February  
at 6:00 (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 ウラディーミル・アシュケナージ  
ソプラノ クララ・エク\*  
コンサートマスター 堀 正文

Vladimir Ashkenazy, conductor  
Klara Ek, soprano\*  
Masafumi Hori, concertmaster

モーツァルト／交響曲 第25番 ト短調 K.183 (24')

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)  
Symphony No. 25 g minor K.183

- I アレグロ・コン・ブリオ
- II アンダンテ
- III メヌエット
- IV アレグロ

- I Allegro con brio
- II Andante
- III Menuetto
- IV Allegro

休憩

Intermission

マーラー／交響曲 第4番 ト長調\* (54')

Gustav Mahler (1860-1911)  
Symphony No.4 G major\*

- I ゆっくりと、急がずに
- II ゆったりとした動きで、慌てずに
- III 平穩にみちて
- IV とてもくつろいで

- I Bedächtig. Nicht eilen
- II In gemächlicher Bewegung. Ohne Hast
- III Ruhevoll
- IV Sehr behaglich

# 公演日程

## B program

第1591回 サントリーホール  
2/21[水] 開演 7:00pm  
2/22[木] 開演 7:00pm

The 1591st Subscription Concert  
on 21st (Wed.) & 22nd (Thu.) February  
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 ウラディーミル・アシケナージ  
コンサートマスター 堀 正文

Vladimir Ashkenazy, conductor  
Masafumi Hori, concertmaster

シングルビエルンソン／スマルトーナリ (2006) (18')

Thorkell Sigurbjörnsson (1938-)  
Sumartónar (2006)

- I 逍遙 (しょうよう) I
- II 輝き
- III 逍遙 (しょうよう) II
- IV サーカスと6月17日

- I Róló I (Playground I)
- II Birtan (The Brightness)
- III Róló II (Playground II)
- IV Sirkus og 17. júní (Circus and Festivities)

エルガー／変奏曲「なぞ」作品36 (29')

Edward Elgar (1857-1934)  
Variations on an Original Theme op.36  
"Enigma"

主題: アンダンテ

- 第1変奏 C.A.E.: リステッソ・テンポ
- 第2変奏 H.D.S-P.: アレグロ
- 第3変奏 R.B.T.: アレグレット
- 第4変奏 W.M.B.: アレグロ・ディ・モルト
- 第5変奏 R.P.A.: モデラート
- 第6変奏 イソベル: アンダンティーノ
- 第7変奏 トロイト: プレスト
- 第8変奏 W.N.: アレグレット
- 第9変奏 ニムロッド: アダージョ
- 第10変奏 ドラベッラ: 間奏曲: アレグレット
- 第11変奏 G.R.S.: アレグロ・ディ・モルト
- 第12変奏 B.G.N.: アンダンテ
- 第13変奏 \*\*\*: ロマンズ: モデラート
- 第14変奏 E.D.U.: フィナーレ: アレグロ

- Theme: Andante
- Var. I C.A.E.: Listesso tempo
  - Var. II H.D.S-P.: Allegro
  - Var. III R.B.T.: Allegretto
  - Var. IV W.M.B.: Allegro di molto
  - Var. V R.P.A.: Moderato
  - Var. VI Ysobel.: Andantino
  - Var. VII Troyte.: Presto
  - Var. VIII W.N.: Allegretto
  - Var. IX Nimrod.: Adagio
  - Var. X Dorabella.: Intermezzo: Allegretto
  - Var. XI G.R.S.: Allegro di molto
  - Var. XII B.G.N.: Andante
  - Var. XIII \*\*\*: Romanza: Moderato
  - Var. XIV E.D.U.: Finale: Allegro

休憩

Intermission

R.シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」作品40 (40')  
ヴァイオリン・ソロ 堀 正文

Richard Strauss (1864-1949)  
"Ein Heldenleben", sym. poem op.40  
Masafumi Hori, violin solo

- I 英雄
- II 英雄の敵
- III 英雄の伴侶
- IV 英雄の戦場
- V 英雄の業績
- VI 英雄の引退と完成

- I Der Held
- II Des Helden Widersacher
- III Des Helden Gefährtin
- IV Des Helden Walstatt
- V Des Helden Friedenswerke
- VI Des Helden Weltflucht und Vollendung

# 公演日程

## C program

第1590回 NHKホール  
2/16[金] 開演 7:00pm  
2/17[土] 開演 3:00pm

The 1590th Subscription Concert  
on 16th (Fri.) & 17th (Sat.) February  
at 7:00pm (Fri.) 3:00 pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 ウラディーミル・アシュケナージ  
コンサートマスター 篠崎史紀

Vladimir Ashkenazy, conductor  
Fuminori Shinozaki, concertmaster

チャイコフスキー／交響曲 第2番 八短調 作品17  
「小ロシア」(32')

Pëter Il'ich Tchaikovsky (1840-93)  
Symphony No.2 c minor op.17  
"Little Russian"

- I アンダンテ・ソステヌート — アレグロ・ヴィーヴォ
- II アンダンティーノ・マルツィアーレ、クワジ・モデラート
- III スケルツォ:アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
- IV フィナーレ:モデラート・アッサイ — アレグロ・ヴィーヴォ

- I Andante sostenuto - Allegro vivo
- II Andantino marziale, quasi moderato
- III Scherzo: Allegro molto vivace
- IV Finale: Moderato assai - Allegro vivo

休憩

Intermission

チャイコフスキー／交響曲 第5番 ホ短調 作品64 (50')

Pëter Il'ich Tchaikovsky  
Symphony No.5 e minor op.64

- I アンダンテ — アレグロ・コン・アニマ
- II アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ
- III ワルツ:アレグロ・モデラート
- IV フィナーレ:アンダンテ・マエストロ  
— アレグロ・ヴィヴァーチェ

- I Andante - Allegro con anima
- II Andante cantabile, con alcuna licenza
- III Valse: Allegro moderato
- IV Finale: Andante maestoso - Allegro vivace



©E.Sakata

指揮 conductor

## ウラディーミル・アシュケナージ

Vladimir Ashkenazy

1937年7月6日、旧ソ連邦ゴーリキー市生まれ。中央音楽学校を経てモスクワ音楽院でピアノを学び、55年「ショパン国際ピアノ・コンクール」で第2位、56年「エリーザベト王妃国際音楽コンクール」および62年「チャイコフスキー国際コンクール」で優勝という輝かしい受賞歴をもって、ピアニストとしてその音楽活動をスタートした。70年以降は指揮活動を活発に行うようになり、フィルハーモニア管弦楽団およびクラーヴランド管弦楽団首席客演指揮者、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督、ベルリン・ドイツ交響楽団首席指揮者・音楽監督を歴任。98～2003年チェコ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者をつとめた。

N響定期公演への初登壇は、2000年10月。2004年9月、NHK交響楽団第2代音楽監督に就任。同年10月9日の就任記念公演で演奏したベートーヴェン《交響曲第4番》《第5番》や、定期における就任記念公演となった2004年10月Aプロでのチャイコフスキー《交響曲第3番》《第4番》のほか、ファン待望の弾き振りによるモーツァルト《ピアノ協奏曲第9番》《第27番》や、2005年末の《第9》ライブもCDリリースされている。

現在、フィルハーモニア管弦楽団およびアイスランド交響楽団桂冠指揮者、EUユース・オーケストラ音楽監督を務めるほか、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・コンサート・ヘボウ管弦楽団など、世界主要オーケストラへの客演も活発に行っている。アシュケナージ & N響による昨年10月の「N響アメリカ公演2006」（カーネギーホールでの公演等を含む7都市7公演）は、各地でスタンディング・オベーションなどの熱い歓迎を受け、各紙誌でも好評が伝えられた。

ソプラノ soprano

**クララ・エク**

Klara Ek



©Sussie Ahlburg

クララ・エクはスウェーデン生まれの若手ソプラノ。ストックホルムの王立音楽院を卒業後、ストックホルム音楽大学でも学んだ。大学では、ピアニストのロジャー・ビニョールズや自国が生んだ偉大なソプラノ、ビルギット・ニルソンにも学んだ。その後、イギリスに留学して、ロンドン王立音楽院ではリアン・ワトソンにも師事している。

プロとしてデビューしたのは2003年というから、まさに新人だが、すでにドロットニングホルム宮廷歌劇場やシュトゥットガルト歌劇場などで活躍している話題のソプラノである。プロ・デビューはデンマーク王立歌劇場のモーツァルト《フィガロの結婚》のズザンナ役だった。これまでに歌ってきた役を見ると、オスカル（ヴェルディ《仮面舞踏会》）、デスピーナ（モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》）、パパゲーナ（モーツァルト《魔笛》）など、若く生き生きした声を持つリリック・ソプラノのレパートリーをこなしている。現在はしだいに役柄を広げ、2005年にはモーツァルト《皇

帝ティウスの慈悲》でヴァイテリア役を歌い、『オペラ』誌で絶賛された。モネ劇場ではルネ・ヤコプス指揮の《魔笛》で第1の侍女を歌い、シュトゥットガルト歌劇場ではモンテヴェルディ《オルフェオ》のプロセルピナと音楽の精を歌っている。またコンサートでは、アシュケナージ指揮のフィルハーモニア管弦楽団との共演で、マーラーの《交響曲第4番》を歌った。さらに最近はやロイヤル・スコティッシュ管弦楽団とメンデルスゾーン《エリア》、ヘルムート・リリングとモーツァルトのモテット《踊れ、喜べ、幸いな魂よ》などを歌っている。またミネソタ管弦楽団と共演してアメリカ・デビューも果たした。日本には2006年3月に初来日し、武蔵野市民文化会館でソプラノ・リサイタルを行っている。今回は指揮者アシュケナージのたつての要請で、NHK交響楽団との共演が実現した。

(石戸谷結子)

ヴァイオリン violin

**堀 正文**

Masafumi Hori



©松嶋惇

1949年富山県生まれ。京都市立堀川高等学校音楽科を経てドイツ・フライブルク音楽大学に留学し、ウールリヒ・グレーリング、ウォルフガング・マルシュナー両氏に師事。在学中より、ハイデルベルク室内合奏団のソリストとして活発な演奏旅行を行い、73年同大学を最優秀の成績で卒業と同時に同大の講師に迎えられたほか、同年には、フランクフルト放送交響楽団との共演が放送され絶賛を浴びるなど、在学中から注目を集めた。ドイツを中心にヨーロッパ各国でオーケストラ活動はもとより、ソロや、ザシュコ・ガヴリロフ、ピーナ・カルミレルリ、ブルーノ・ジュランナ等との共演による室内楽など、幅広い活躍を展開した。

79年、東京でのN響とのチャイコフスキー《ヴァイオリン協奏曲》共演が大きな反響を呼び、同年9月、コンサートマスターとしてN響入団。現在、ソロ・コンサートマスター。88年にはヴァーツラフ・ノイマン指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団日本ツアーのソリス

トを務め、好評を博した。93年のシャルル・デュトワ率いるN響ヨーロッパ公演ではソリストとして演奏、「極めて繊細で澄んだ音で華麗な演奏」と各地で高い評価を得た。

N響での功績に対して91年第11回有馬賞を受賞。

ジュネーヴ国際コンクール、レオポルト・モーツァルト国際コンクール、シュポーア国際コンクールなど国際コンクールの審査員を務めるほか、桐朋学園大学などで後進を育成している。

R.シュトラウス《英雄の生涯》では、実際には作曲家自身の妻パウリーネを描いていると言われる第3部「英雄の伴侶」で、妻の性格を描写するヴァイオリン・ソロを担当する。

## モーツァルト

## 交響曲 第25番 ト短調 K.183

1773年3月、モーツァルト(1756-91)はイタリア旅行を終えて4曲の交響曲を書いた。その後、7月16日から約2か月間のウィーン滞在后、ザルツブルクで書かれた交響曲は前の4作に見られたイタリア的な要素から完全に脱却し、独自の交響曲創造へと向かった。それが「小ト短調」とも呼ばれる第25番の交響曲ト短調で、さらにその年から翌年にかけての交響曲、すなわち《第25番ト短調》K.183、《第28番ハ長調》K.200、《第29番イ長調》K.201の3曲で、それまでの交響曲を総決算したと考えることができる。モーツァルトの交響曲には短調の曲が2曲しかないが、最後の3つの交響曲、《第39番変ホ長調》《第40番ト短調》《第41番ハ長調》の3曲は、調性的な関係などを考慮しても、最初の交響曲の総括をさらに一段高めたものと考えられる。

この《第25番》は短調という性格もあり、《弦楽五重奏曲ト短調》K.516、2曲の短調のピアノ協奏曲、《レクイエム》等々に聴かれる劇性や「疾走する悲しみ」に通じる道を切り開いた。曲は久々にメヌエットを含む4つの楽章構成に戻り、当時としては珍しく4本のホルンを使ってその効果をあげている。また、自筆譜には第2楽章のみにファゴットが使われているが、他の楽章でユニゾンで使われていた可能性も高く、新全集はそ

の立場から両端楽章にもファゴットを加えている。

**第1楽章** アレグロ・コン・プリオ ト短調 4/4拍子。ソナタ形式。シンコペーションの主題で始まり、推移部、第2主題が巧みなバランスで緊張感を生んでいる。

**第2楽章** アンダンテ 変ホ長調 2/4拍子。3部形式。ヴァイオリンとファゴットの対話が優美に展開される。

**第3楽章** メヌエット ト短調 3/4拍子。複合3部形式。短調で始まるメヌエットで、トリオの部分に明るい日差しが差し込む。

**第4楽章** アレグロ ト短調 2/2拍子。ソナタ形式。前の楽章をまとめるように構成され、主題は前楽章のメヌエット主題を思わせる。さらに第1楽章のシンコペーションのリズムや半音階的な動機などが展開部の性格を彩っていく。

作曲年代：1773年10月5日

初演：不明

楽器編成：オーボエ2、ファゴット2、ホルン4、  
弦楽

(三橋圭介)

マーラー

## 交響曲 第4番 ト長調

莫大な野心と超人的な克己心を武器に、31歳のグスタフ・マーラー(1860-1911)はオペラ指揮者としての出世の階段を上りつづけていた。ワーグナーの《タンホイザー》を指揮してハンブルク市立歌劇場にデビューして10か月が経った1892年、マーラーは年明けとともに、多忙に多忙を極める指揮活動の合間をぬって、かねてより着目していたドイツ古謡詩集『こどもの不思議な角笛』への作曲を再開する。マーラーは、このときまでに、『角笛』に歌詞を求めた歌曲をすでに9つ作曲していたが、それらはいずれもピアノ伴奏による歌曲であった。しかし、ここに来てマーラーは『角笛』による歌詞を管弦楽に伴奏させることを構想する。こうして生まれる「交響的角笛歌曲」とともに、作曲家としてのマーラーは、歌曲と交響曲の相互乗り入れの時代へと足を踏み入れたのである。今日の《交響曲第4番》はその1つの成果である。

始点となる1892年から1901年までの10年間に、マーラーは「交響的角笛歌曲」を15曲作曲し、それらは第2、第3交響曲の創作とも深くかかわったのだが、今日の《交響曲第4番》の母体となった交響的角笛歌曲が《天上の生活》であった。実際、《天上の生活》は、そのまま《交響曲第4番》の終楽章になったというだけでなく、マーラーの創

造的精神のなかで不思議な変容を遂げ、《交響曲第4番》の全体へと成長していったのである。

マーラーは、はやくも1892年3月までに《天上の生活》を完成させているが、彼は当初、この《天上の生活》をあとに作曲する別の交響的角笛歌曲《浮き世の生活》(1893年の夏以前に作曲)と対にする計画だったという。頁をめくって《天上の生活》第2連の歌詞をみてほしい(11頁)。「天の蔵では酒は無料(ただ)／パンを焼くのは天使たち」。この言葉は、《天上の生活》—母親が貧乏のためにパンを与えられず子どもを餓死させる—との対比で考えると、ずいぶんアイロニカルに響く。《天上の生活》は、批評家を揶揄した交響的角笛歌曲《高い知性への賛歌》(1896年6月)と同種の、ひとを食った戯画だったのだ。

しかし、この戯画としての《天上の生活》は、マーラーの無意識にゆっくりと働きかけ、彼の精神のなかで不思議な変容を遂げる。マーラーは、《交響曲第3番》に取り組んでいた1894年か95年になって、突如これが、『角笛』詩集の「三人の天使が歌う」—地上でイエスを裏切ったペーテロが天上でその罪を許される—の解決になりうることに思い至る。再び11頁に飛んで《天上の生活》第1連の歌詞に目をとめてほしい。

「歌って踊って跳んでははねて!／ペーテロさまが見ておわす!」。《天上の生活》は、大いなる愛に許されたペーテロが住まう至福の世界を描く正真正銘の聖画として輝きはじめる。

《交響曲第4番》は、この新たな輝きのなかから生まれでた作品である。1902年、マーラーは結婚したばかりの妻アルマにあてて、《交響曲第4番》は黄金色を背景にして描かれた古い絵のようなものだ、と書き送っている。第1楽章は、もはや死に捕らえられることのない天上の世界の喜びの爆発であり、第2楽章は、完全な平安が逆説的に呼び覚ます、奇怪な恐怖であり、第3楽章は、乙女たちとともに殉教した聖ウルズラの無限の優しさの発露である。これら3つの楽章が、祭壇画のパネルのように終楽章たる聖画「天上の生活」を取り囲み、金色の糸で装飾している。

マーラーは《交響曲第4番》を1899年から1900年にかけて、アウスゼー、マイアーニヒ、ウィーンと、さまざまな場所で書きつけていった。はじめに戯画として《天上の生活》を書いたときまだハンブルクにいたマーラーだったが、これが聖画に変容し《交響曲第4番》にまで成長したとき、彼はオペラ指揮者の頂点であるウィーン宮廷歌劇場の芸術監督にまで昇りつめていた。しかし、この

社会的成功は、彼の内面の幸福をも保証したのだろうか。マーラーは《交響曲第4番》の一応の作曲を終えた1900年の8月、友人にあててこう書いている。「今年の冬にはこの作品を清書します。この作業は喧騒のただなかにある僕の生活にここ数年ずっと欠けていた拠り所を与えてくれることでしょう。もし人が、自分の聖所なしに生きつづけなければならぬとしたら、まったく神に見放されたような気分になるでしょう」。《交響曲第4番》を聴けば、喧騒のなかでマーラーが守っていた聖所がどれほどのものであったかが分かるに違いない。決して癒されない孤独のゆえに喧騒のなかでしか生きられなかった男のうちにも、このような聖所が残されていたことを知るとき、わたしたちは一抹の悲しみとともに、なぐさめという言葉の意味を解することができるのではなかろうか。

**初演**：1901年11月25日

**楽器編成**：フルート4(ピッコロ2)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット3(E♭クラリネット1、バス・クラリネット1)、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット3、ティンパニ1、大太鼓、トライアングル、鈴、グロックンシュピール、シンバル、タムタム、ハープ1、弦楽、ソプラノ・ソロ

(藤田 茂)

# マーラー 交響曲 第4番 ト長調 歌詞対訳

Mahler Symphony No.4 G major

訳：檜山哲彦

Translation: Tetsuhiko Hiyama

## IV.

Wir geniessen die himmlischen Freuden,  
d'rum tun wir das Irdische meiden.  
Kein weltlich' Getümmel  
hört man nicht im Himmel!  
Lebt Alles in sanftester Ruh'!  
Wir führen ein englisches Leben!  
Sind dennoch ganz lustig daneben!  
Wir tanzen und springen,  
wir hüpfen und singen!  
Sanct Peter im Himmel sieht zu!

Johannes das Lämmlein auslasset,  
der Metzger Herodes drauf passet!  
Wir führen ein geduldig's,  
unschuldig's, geduldig's,  
ein liebliches Lämmlein zu Tod!  
Sanct Lucas den Ochsen tät schlachten  
ohn' einig's Bedenken und Achten,  
der Wein kost kein Heller  
im himmlischen Keller,  
die Englein, die backen das Brot.

Gut' Kräuter von allerhand Arten,  
die wachsen im himmlischen Garten!  
Gut' Spargel, Fisolen  
und was wir nur wollen!  
Ganze Schüsseln voll sind uns bereit!

## 第4楽章

うれしい<sup>たの</sup>愉しい天上の国  
浮世のことは忘れよう  
天の国には  
地上の騒ぎはとどかない!  
どこもかしこも平穩そのもの!  
天使のような暮しぶり!  
とはいえ、まことに浮きうきわくわく!  
歌って踊って  
跳んでははねて!  
ペーテロさまが見ておわす!

ヨハネスさまが小羊放せば  
肉屋のヘロデがつけねらう!  
このおとなしいけがれない  
このかわいらしい小羊を  
われらは死なしてしまうのだ!  
気づかいなどはどこへやら  
ルーカスさまは雄牛<sup>ほふ</sup>を屠る  
天の蔵では  
酒<sup>ただ</sup>は無料  
パンを焼くのは天使たち

おいしい野菜は  
庭にいっぱい!  
アスパラ、インゲン  
なんでも揃う!  
眼のまえの皿に山盛り!

Gut' Äpfel, gut' Birn' und gut' Trauben!  
 Die Gärtner, die Alles erlauben!  
 Willst Rehbock, willst Hasen,  
 auf offener Strassen  
 sie laufen herbei!

Sollt ein Fasttag etwa kommen  
 alle Fische gleich mit Freuden  
 angeschwommen!

Dort läuft schon Sanct Peter  
 mit Netz und mit Köder  
 zum himmlischen Weiher hinein.  
 Sanct Martha die Köchin muss sein!

Kein' Musik ist ja nicht auf Erden,  
 die uns'rer verglichen kann werden.  
 Elftausend Jungfrauen  
 zu tanzen sich trauen!  
 Sanct Ursula selbst dazu lacht!  
 Cäcilia mit ihren Verwandten  
 sind treffliche Hofmusikanten!  
 Die englischen Stimmen  
 ermuntern die Sinnen!  
 Dass Alles für Freuden erwacht.

リングにナシにブドウもたっぷり!  
 庭守りたちは口を出さない!  
 シカやウサギが望みなら  
 ひらけた道を  
 獲物のほうからやってくる!

肉断ちの日は嬉々として  
 魚がこぞって寄ってくる!

ほおらごらんよ  
 網と餌を手にもって  
 池に踏みこむペーテロさま  
 料理はきっとマルタさま!

がく ね  
 楽の音というならば  
 現世で聞けないものばかり  
 数えきれない処女おとめらが  
 すすんで踊る!  
 ウルズラさまさえつられて笑う!  
 ツェツィーリエさまは一族つれて  
 じつにみごとな宮廷楽士!  
 天使らの歌声は  
 身をも心も浮きたたせ  
 万物こぞって喜びわに沸く!

Aus: "Der Himmel hängt voll Geigen — Bayerisches Volkslied —"

in: *Des Knaben Wunderhorn*

「天上の国は楽の音にみちあふれ——バイエルン民謡——」より  
 『こどもの不思議な角笛』所収

## シグルビェルンソン スマルトーナール

北欧のなかで現代音楽が最も盛んな国はフィンランドだろう。特にサロネンやサーリアホなどはヨーロッパやアメリカで活発に活動し、その動向はCDや雑誌メディアなどで伝えられる。だが同じ北欧でもアイスランドについてはほとんど知られていないというのが実情である。地理的にはヨーロッパで最も西に位置し、北海道と四国を合わせたくらいの島国である。おそらく音楽の世界で最も有名なのは歌手のビョークだが、N響の音楽監督アッシュケナージがこの国籍を持っている。彼とアイスランドの音楽界での活動は日本ではほとんど紹介されることはないが、その結びつきは音楽祭や作曲家（委嘱）など多方面に渡っている。2006年は「日・アイスランド外交関係開設50周年」の記念年にあたり、それを記念するためにアッシュケナージが取り上げたのが、これまでに作品を委嘱し、国外への紹介も行ってきたアイスランドを代表する作曲家ソルケトル・シグルビェルンソン（1938-）である。

1938年生まれのシグルビェルンソンはレイキャヴィク音楽大学でピアノ、ヴァイオリン、オルガン、音楽理論を学び、その後アメリカに留学、ミネソタのハムリン大学、さらにイリノイ大学では電子音楽をレイヤーン・ヒラーに師事した。62年に帰国し、レイキャヴィク音楽大学で音楽理論と作曲を教えた。作曲

家、ピアニスト、批評家、アイスランド放送の解説者としても活動し、作曲家としては合唱（《テ・デウム》）から室内楽（《コペンハーゲン四重奏曲》）、オーケストラ作品（《氷河のノクターン》、フルートと弦楽のための《コロンバイン》）など多彩なジャンルを網羅している。作風は前衛的なものから伝統的な書法、さらには民俗音楽までを総合するポストモダンと呼べるもので、その響きは限りなく無駄をそぎ落とした響きの純化（神秘）への志向、さらに古代北欧の神話サガに通じる物語世界も感じられる。本日演奏される《スマルトーナール》もそうした特徴を持っている。

《スマルトーナール》は2006年に作曲され、タイトルは「儚き夏の音楽」と訳すことができる。白夜の国の短い夏の音物語を思わせるこの作品は4つの組曲風の構成を持ち、北欧の作品に共通して感じられる透明感のある響きの特徴としている。

**第1曲**「しょうよう遣遥1」は冒頭にフルートで現れるインドネシアの5音階を思わせる旋律を中心に進み、その後その線の綾を半音階的に展開していく。

**第2曲**「輝き」は白夜の国のものであり、ギラギラとした太陽ではない。ヴァイオリンの白光するハーモニクスの上でフルートが半音の動きをする導入部のあと、エキゾチック

な3連符の動きのオスティナートが始まる。さまざまな楽器が交換して光のグラデーションを作る美しい楽章。

物悲しい**第3曲**「逍遙2」の後、最後**第4曲**「サーカスと6月17日」はそれまでの3曲を総合するようにリズム動機を操作し、リズムカルに曲想を打ち出していく。英文のタイトル表記は「Circus and Festivities(サーカスと祝いの行事)」となっており、祝典を表す6月17日とは、アイスランドがデンマークから独立した記念日である。

**作曲年代**：2006年

**楽器編成**：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2 (Esクラリネット1)、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、アルト・サクソフォーン1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、ボンゴ、コンガ、シンバル、中太鼓、小太鼓、大太鼓、ウインド・マシーン、笛、風船、チューブラー・ベル、タムタム、グロッケンシュピール、ハープ1、ピアノ1、弦楽

(三橋圭介)

エルガー

## 変奏曲「なぞ」作品36

エドワード・エルガー(1857-1934)の代表作として知られる《変奏曲「なぞ」》は14人の人物を主題に変奏した作品だが、作曲家自身がそのような表題で呼んだことはなかった。作曲後、自筆譜の最初のページに「エニグマ(謎)」という言葉を書き込んだことからこの表題で知られるようになった。初演のプログラム・ノートでエルガーは次のように書いている。

謎についてはなにも説明しない。  
〈影の声〉はそのままにしておかなければならない。変奏曲と主題の関係はわずかしかないことを報告しておこう。全体を通して別の大きな主題が〈進行する〉が、それは演奏されることはない。

この言葉が作品にさまざまな憶測を呼んだ。なかでも〈進行する〉「大きな主題」に関しては、主題の対旋律にあらわれるスコットランド民謡《Auld Lang Syne(オールド・ラング・ザイン=遠い昔)》(日本では《蛍の光》として知られる)が有力だが、すべての変奏曲に聴かれるわけではない。また、友情との関わりから「大きな主題」がこの民謡の「遠い昔」という回想を表していることも知られている。エルガーは次のようにも言っ

ている。

登場人物の謎を解き明かそうとしたところで得られるものはなにもありません。聴き手は音楽だけを聴かなければならず、複雑なくプログラムに悩まされてもいけない。私にとって友人たちは創造の源となった。かれらの理想化が喜びであり、それは年とともにますます強くなった。

17小節の主題の後、以下14の変奏曲(括弧内は登場人物のイニシャルや愛称などを表している)が続く。

**第1変奏**(C.A.E.) エルガーの妻アリス。

**第2変奏**(H.D.S-P.) ヒュー・デーヴィッド・ステュアート・パウエル。ピアニスト。変奏では「特徴ある全音音階が調を逸脱して進む」。

**第3変奏**(R.B.T.) リチャード・バクスター・タウンゼント。「彼の低い声が時々裏返って〈ソプラノ〉に跳ぶ」。

**第4変奏**(W.M.B.) ウィリアム・ミース・ベイカー。「彼はその日の手はずを読んで聞かせ、ドアをボタンと閉めてあわただしく出て行く」。

**第5変奏**(R.P.A.) リチャード・ペンロー

ズ・アーノルド。詩人マシュー・アーノルドの息子。「気まぐれで機知に富む」。

**第6変奏**(イザベル—Ysobel) イザベル・フィットン。弦を飛び跳ねるようにヴァイオリンを演奏する。

**第7変奏**(トロイト—Troyte) アーサー・トロイト・グリフィス。打楽器が彼のピアノを演奏する不器用な企てを表す。

**第8変奏**(W.N.) ウィニフレッド・ノーベリ。彼女の平和に満ちた18世紀の家を表している。

**第9変奏**(ニムロッド—Nimrod) オーガスト・N・イエガー。彼の愛すべき誠実な人柄を表現している。

**第10変奏**(ドラベッラ—Dorabella) ドラ・ベニー。彼女は吃音だった。

**第11変奏**(G.R.S.) ジョージ・ロバートソン・シンクレア。最初の数小節は彼女の大きなブルドッグのダンを仄めかしている。

**第12変奏**(B.G.N.) バジル・G・ネヴィンソン。「親愛なる友に捧げる」。

**第13変奏**(\*\*\*) 唯一アスタリスクの付いた変奏。エルガーの隠された恋人ジュリア・ワーシングトンと憶測されてきたが、これについては、『フィルハーモニー』2月号・水越健一氏執筆の「生誕150年のエルガーの人生をたどる」を参照すると、メンデルスゾーンの《静かな海と楽しき航海》の美しい

引用がこの秘密と関係があり、アリスと婚約する前の恋人ヘレン・ウィーバーが有力視されている。

**第14変奏**(E.D.U.) 作曲者自身。エドゥとは妻アリスが呼んだエルガーの愛称。

**作曲年代**：1899年2月19日

**初演**：1899年6月19日、ハンス・リヒターの指揮による

**楽器編成**：フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、小太鼓、トライアングル、大太鼓、シンバル、パイプ・オルガン1、弦楽

(三橋圭介)

## リヒャルト・シュトラウス 交響詩「英雄の生涯」作品40

1894年、指揮者・作曲家としての手腕を高く評価された30歳のリヒャルト・シュトラウス(1864-1949)は、故郷ミュンヘンの宮廷劇場に副楽長・宮廷指揮者の肩書きを得て戻ってくる。だが同劇場の音楽部門支配人カール・フォン・ペルファル男爵との折り合いは悪かった。やがて人気絶頂となったシュトラウスに対する態度は軟化するが、それでもなお音楽総監督という全権をこの若者に与えてしまうことには抵抗があった。そのうちシュトラウスは、ミュンヘンの音楽監督よりもはるかに待遇のよいベルリン宮廷歌劇場の音楽総監督への就任を受諾し、煮え湯を飲まされ続けた故郷のミュンヘンを離れることになる。シュトラウスがミュンヘン時代の最後に構想した2つの作品こそ、この有能な部下が上司に向かって投げつけた反骨精神の表れだった。1つは交響詩《英雄の生涯》(1899年)、そしてもう1つがオペラ《フォイヤースノート(灯の消えた町)》(1901年)である。

シュトラウスは後年の回想録のなかで、この《フォイヤースノート》を「劇場を批判する小さな間奏曲であり、愛する生まれ故郷への小さな仕返しである」と述べている。このオペラで風刺されているのは、ワーグナーと当時まだハンス・フォン・ビューローの妻だったコジマとのスキャンダルを大げさにかき立ててミュンヘンから追い出すという事件を引き起こし、そしていままた陰謀を企み新しい時代の音楽の主導者たる自分に嫌がらせを続けるミュンヘンの人々たちである。「大きな田舎」と呼ばれるミュンヘンをはじめとした南ドイツ・オーストリアの文化はかなり保守的であり、シュトラウスの斬新な音楽が

とまどいとともに受け入れられたであろうことは想像に難くない。自分の故郷であるが故に、シュトラウスはよりそうした保守性をよけいに歯がゆく思っていたのだろう。そして《英雄の生涯》も、この《フォイヤースノート》と同じ系統の作品である点を見逃してはならない。この曲が構想されたのは、まさにベルリンとミュンヘンの地位を両天秤にかけていた頃であり、作曲のスケッチを完成させたのもいまだミュンヘンにとどまっている1898年夏のことである。

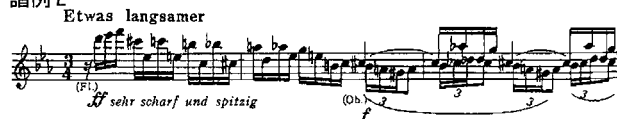
《英雄の生涯》全体は6つの場面から成り立っている。はじめの3つの場面で「英雄」(ホルン・低弦、変ホ長調、譜例1)、「英雄の敵」(木管・チューバ、ト短調、譜例2)、「英雄の伴侶」(ヴァイオリン、譜例3)という登場人物が揃い、それぞれのキャラクターは明白に色分けされている(ソナタ形式の提示部にあたる)。4番めの場面「英雄の戦場」では英雄とその敵が戦い、伴侶が声援を送る(展開部)。見事勝利を収めた英雄は第5部で自分の収めてきた業績(自作品の引用)を振り返り、最終場面となる第6部で悠々自適の人生を閉じる(再現部とコーダ)。

第2部を構成する英雄の敵たちは、ワーグナー《マイスタージンガー》の敵役ベックメッサー同様、管楽器のおどけるようなモチーフの組み合わせによって描かれている。ほとんどは木管楽器の突き刺すようなメロディーの組み合わせだが、ここにテナーおよびバス・チューバによってまるであくびを模したかのようなモチーフが登場する(譜例4)。木管楽器のモチーフが、シュトラウスに敵対的な批評家を表すかのような好戦

## 譜例 1



## 譜例 2



## 譜例 3



## 譜例 4



的、攻撃的な性格を有しているとするば、このモチーフはアンニュイ、無関心、無能といった雰囲気有しているように聞こえる。まるで上司ペルファルを思わせるこのモチーフこそが、最後の2つの場面を構成する1つの重要な要素として機能している。第5部「英雄の業績」、および第6部「英雄の引退と完成」と呼ばれる部分は、まさにこのモチーフに導かれ、過去を苦々しく回想するかのよう始まるのである。結局主人公の英雄は自身の調性である変ホ長調に落ち着いて、伴侶とともに静かな生活を送る決意をする。そこに見られるのは、第4部で派手に敵を打ち負かした姿ではなく、むしろ戦いに疲れ果て、戦いを放擲して隠棲するような後ろ向きの姿である。曲の終結部も、元々はホルン(英雄)とヴァイオリン(その伴侶)のソロで静かに消えていくような終わり方だったが、友人の助言により、現在のよう管楽器によるファンファーレの形に書き直された。晩年のシュトラウスはこれを聴い

て「まるで国葬だな」と自嘲気味なコメントを残したと言われている。シュトラウスはこの作品で30代前半に経験した世間の無理解や挫折といった経験を自らの敗北ととらえ、この作品をその敗北から立ち直るためのきっかけとしたのである。

**作曲年代**：1898年夏にスケッチ完成。同年12月27日にベルリンにて完成

**初演**：1899年3月3日(指揮：リヒャルト・シュトラウス)フランクフルト・アム・メイン

**楽器編成**：フルート3、ピッコロ1、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、Esクラリネット1、バス・クラリネット1、ファゴット3、コントラファゴット1、ホルン8、トランペット5(バンド3)、トロンボーン3、テノール・チューバ1、バス・チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓、中太鼓、タム・タム、トライアングル、ハーブ2、弦楽

(広瀬大介)

## チャイコフスキー

## 交響曲 第2番 ハ短調 作品17「小ロシア」

ウクライナ(旧称:小ロシア)は、ローマ・カトリック教会圏とビザンツ教会圏に接する文化先進地域で、早くからの多民族共生が独特の文化風土を作りあげた。同地出身の音楽家(理論家と名歌手、作曲家)は中世以来、ロシア音楽界に大きく貢献。ムソルグスキーの《ソロチンスクの市(いち)》(1874~80)のほか、同地を舞台とする名作オペラも多い。

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-93)の生涯はウクライナと深く関わっていた。妹アレクサンドラ(1841-91)が1860年11月同地のカメンカに嫁ぎ——彼の兄弟姉妹計5人のなかで唯1人——大家族(3男4女)を築いた。1865~90年頃の彼は、暇があれば妹宅で幸せな少年時代を体験し、心ゆくまで創作に励んだ。バレエ《白鳥の湖》、オペラ《エフゲーニ・オネーギン》(オーケストレーション)、ピアノ曲《子どものアルバム》など多くの傑作は、その成果なのである。また妹宅から遠からぬ古都キエフでは、由緒ある聖堂や修道院で聖歌の美しさに陶醉し、宗教曲を書いている。

チャイコフスキーは創作活動の初期に、ロシア、特にウクライナ民謡を多くとりあげた。《交響曲第2番》は有名な《アンダンテ・カンタービレ》(1871)とともに、ウクライナ民謡を引用した初期の代表作、そしてロシア5人

組の音楽理念に彼なりの共感を示した最初の大作である。

1872年6月チャイコフスキーは妹宅で召使が口ずさんでいた旋律から、スケッチを始めた。9月初めにモスクワでオーケストレーションにかかり、同年11月22日前には完成。帝室ロシア音楽協会モスクワ支部に捧げた(謝礼は300ルーブル)。翌73年1月26日同支部演奏会での初演は大成功。〈形式の完成という意味で最高の作〉と自負する作曲者は、2か月後のモスクワ再演にそなえてオーケストレーションを増強した。そして音楽院の旧友ベッセル(出版人)に自筆総譜を贈る。翌73年ピアノ版(作曲者編)が出版されたものの、約束した総譜出版は79年末まで実現しない。チャイコフスキーは〈第1・3楽章を書き換え…第4楽章を短く〉〈成熟していない凡庸な交響曲を傑作に〉と意気込み、ローマ滞在中にスケッチを〈3日で改訂〉。初版の自筆総譜を廃棄した。タネーエフが改訂版よりも豊かで独創的と評した初版は没後、パート譜から復元された(ソ連版全集に第1、3楽章、そして第4楽章[一部]がある)。

初版創作当時のチャイコフスキーは、いつものように「男友達」と職場(モスクワ音楽院)の悩みで消耗していた。だがこの作品は——彼の大作には珍しく——明るい。

さらに民謡の処理法などは、ロシア5人組の面々を感動させた。72年12月26日ペテルブルクのリムスキー・コルサコフ邸で終楽章を自らピアノで披露すると、〈一同は熱狂〉。《交響曲第2番》は5人組がもともと評価した彼の作品となり、両者の接近を促すことになる。なお副題「小ロシア」は、友人カシキン(音楽史家)の発案によるらしい。以下は改訂版による解説である。

**第1楽章** アンダンテ・ソステヌート 4/4 拍子—アレグロ・ヴィーヴォ 2/2拍子 ハ短調 ソナタ形式。序奏主題ほかで有名なロシア・ウクライナ民謡《母なるヴォルガを下りて》を引用。初版より119小節短い。

**第2楽章** アンダンティーノ・マルツィアーレ、クワジ・モデラート 変ホ長調 4/4拍子。3部形式。主部は自作オペラ《オンディーヌ》(1869:総譜は自ら廃棄)の「ベルタルダとフルトブラントの婚礼の行進」(第3幕)を借用。また中間部でロシア民謡《紡ぎなさい》をほぼ原曲のまま使う。行進曲を緩徐楽章にしあげ、叙情的な民謡旋律という異質の素材と見事に繋げた。改訂は速度記号のみ(初版は「アンダンテ・マルツィアーレ」)。

**第3楽章** アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 変ホ長調 3/8拍子。スケルツォ。単純なリズムに基づきながら、巧みなリズム分割で

多様なアクセントを作り、主部と中間部双方の素材によるコーダで終わる。初版のオーケストレーションなどを根本的に変えた。

**第4楽章** モデラート・アッサイー アレグロ・ヴィーヴォ ハ長調 2/4拍子。ウクライナ民謡《鶴》の冒頭フレーズは、オーケストレーションなどを変えながら執拗に反復される。グリンカやバラキレフら好みのこの手法が、洗練された筆致で使われる。改訂版では、初版の第1主題の再現(計147小節)を削った。

**作曲年代** : 1872年6月～11月(補筆1873年2月～3月)。改訂版 1879年12月30日\*～80年1月16日\*

**初演** : 1873年1月26日。モスクワ。N.ルビンシテインの指揮。改訂版は1881年1月31日。ペテルブルク。K.ジーケの指揮

**楽器編成** : フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、タムタム、弦楽

〈 〉はチャイコフスキーの書き言葉。

\*のない日付は旧ロシア暦(12日を加えると西暦になる)。

(伊藤恵子)

## チャイコフスキー

## 交響曲 第5番 ホ短調 作品64

「宿命」はチャイコフスキーの手紙に頻出する言葉だが、《交響曲第4～6番》はいずれもその影を感じさせる。《第5番》の主題のいくつか(またはその原型)は、1887年8月ドイツのアーヘンで書かれ、プログラム〈第1楽章は宿命への全幅の服従…嘆き…運命の抱擁に身を投じるのか?〉などがある。完成作には随所で諦めと悲しみと死が漂い、「深いメランコリーと絶望への情熱は《第6番》と共通…《第5番》も《悲愴》と呼べる」(ハンスリック)かもしれない。

チャイコフスキーは交響曲《マンフレッド》(1885)の後、シェークスピアの《ハムレット》を考えた。残された創作ノートからは、第1楽章の導入部と第2・3楽章の主題のいくつかのほか、《第5番》の音楽素材と《ハムレット》との深い精神的結びつきがうかがわれる。彼は《マンフレッド》で、バルリオーズ風の「固定楽想」に挑戦。《第5番》でも特定のリズムと旋律を曲全体で感情の担い手として多様に変化させ、わかり易いメッセージをめざした。均整のとれた構成などから、この作品は彼の最も美しい交響曲と言われており、ドヴォルザークの《交響曲第8番》やショスタコーヴィチの《交響曲第10番》などへの影響も指摘される。

チャイコフスキーは第1回西欧指揮旅行(88年1月5日\*～3月22日\*)で大喝采をあび

ながらも、持病の鬱病に悩まされた(クラウス・マンの小説に詳しい)。2番目の公演地ハンブルクで知りあったアヴェラルマン(当時82歳/同地フィルハーモニー協会幹部)はこの旅で彼が安らぎをおぼえた数少ない人物だった。〈父親のような〉暖かさをもつ古老は、彼の音楽を愛し素質を認めた。ただ同地で演奏された彼の作品(《オーケストラ組曲第3番》《弦楽セレナーデ》《ピアノ協奏曲第1番》)の一部に異を唱え、オーケストレーション、特に(騒々しい打楽器)を批判。文明化されていないロシアを去り、ドイツに住むよう勧めるのだった。チャイコフスキーはコーカサス経由の帰路で交響曲を考え、3月28日〈夏に交響曲を書く〉と宣言。4月24日グリーグに新作交響作品の交換を提案している。だがスケッチ(5月半ば～6月17日)とオーケストレーション(6月29日～8月14日)を終えると、アヴェラルマンに捧げ、草稿をイッポリトフ・イワーノフに送った(グリーグには幻想序曲《ハムレット》を献呈)。彼はハンブルクの〈フィルハーモニーに交響曲を書かねば〉(6月20日)と綴っている。委嘱はなかったから、ロシアでも立派な交響曲を書けると証明したかったのだろう。

チャイコフスキーは初演(88年11月5日/ペテルブルグ)やドイツ初演(89年3月15日\*/ハンブルク)ほか数回ほど、自ら《第5番》

を指揮していた。ただしアルトゥール・ニキシュの指揮(92年／ペテルブルグ)を聴いた後は、自分の能力に限界を認めてこの作品を指揮レパートリーから除いている。なおアヴェラルマンは風邪でハンブルク初演に欠席。作曲者は熱烈な謝辞を受けとっただけで、作品の印象を直接聞くことなく翌年末、老人の訃報に接した。

《第5番》は晩年書かれたどの器楽作品よりも作曲者の存命中に成功した。だが〈もう書き尽くしたのでは〉(88年5月15日)などいつもの不安からか、この作品には、ほかに例がないほど愛憎相半ばした感情を抱き続けた。〈失敗作…わざとらしい〉(12月2日)と感じて、総譜を火に投げこもうとする。3か月後ハンブルク初演前に同宿のブラームスが滞在をのばして《第5番》の稽古に来たと大喜び。「新時代の最も重要な交響作品の1つ」と同地の好意的な新聞評もあり、〈好きになった〉(89年3月17日\*)のである。

**第1楽章** アンダンテ 4/4拍子—アレグロ・コン・アニマ 6/8拍子 ホ短調。導入部と主部(3つの主題をもつ自由ソナタ形式)の冒頭旋律はいずれも、ロシア歌謡との類似が指摘されている。

**第2楽章** アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ ニ長調 12/8拍

子。6度下降で始まる第2主題のスケッチには〈一筋の光?…希望はない〉のメモがある。

**第3楽章** アレグロ・モデラート イ長調 3/4拍子。優雅なワルツとスケルツォ風の間部(嬰へ短調 2/4拍子)を対比させる。

**第4楽章** アンダンテ・マエストーソ ホ長調 4/4拍子—アレグロ・ヴィヴァーチェ ホ短調 2/2拍子。導入部とロンド。ハンブルク初演前ブラームスに凡庸と評価され、一部を削ったが印刷譜にはない。

**作曲年代**：1888年5月～8月14日。

**初演**：1888年11月5日。ペテルブルク。作曲家自身の指揮

**楽器編成**：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、弦楽

〈 〉はチャイコフスキーの書き言葉。\*のない日付は旧ロシア暦(西暦はこれに12日を加える)。

(伊藤恵子)

## 次回(4月)の定期公演 聴きどころ

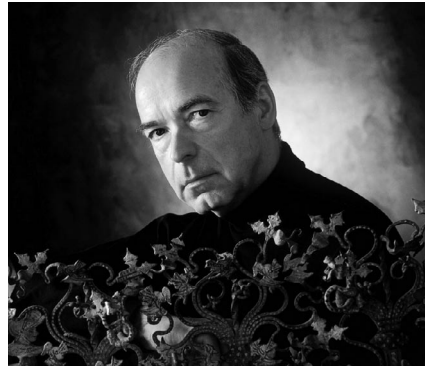
### バーメルトで聴く名曲に新たな期待!

広瀬大介

#### ■ 奇才バーメルトが ドヴォルザークをどう読み解くのか

こんにちの指揮者は、従来の古典的なレパートリーを聴かせるだけにとどまらず、珍しい曲目の発掘とその紹介によって、自身の音楽の個性を聴衆に披露することも、その要求される能力の一部となってきた感がある。

知られざる古典派の作品や現代作品を積極的に指揮するスイス出身のマティアス・バーメルト(1942年生まれ)も、こうした活躍によってその存在が広く知られるようになった指揮者の1人である。バーメルトがいわゆるスタンダードなレパートリー以外にも目を向けるようになったのは、その師匠であるジョージ・セルやレオポルド・ストコフスキーといった指揮者の薫陶にあるのだろう。現在では西オーストラリア交響楽団の首席指揮者、マレーシア・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者・アーティストック・アドバイザーを務める傍ら、フィルハーモニア管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、BBC交響楽団、バーミンガム市交響楽団、パリ管弦楽団、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団などへ定期的に客演



バーメルト

©Eric Richmond

を重ねている。

NHK交響楽団への客演は、2000年の「Music Tomorrow」がはじめというのも、現代作品に強いバーメルトの力量が買われたものと思われる。ところが、2003年6月、2005年11月に続いて4度めの登場となる2007年4月も、取り上げられる曲目はどれをとってもスタンダードなレパートリーの数々が並んでいるのに驚かされた。とくにAプログラムのメイン曲目であるドヴォルザークの《交響曲第8番》などは、名曲中の名曲であろう。とはいえ、楽曲の緻密な分析を得意とする指揮者がこの作品を得意とするのは、筆者なりに分からないでもない。一聴するかぎり

は、実に耳に心地よく、力強いボヘミアの旋律が次から次へと繰り出されるが、よくよくスコアを見れば、驚くほど多彩な旋律が特に木管楽器を中心に、あちこちに埋め込まれているのが分かる。ふつうこの副次的な旋律は、弦楽器による主旋律の陰に隠れたり、あるいは金管楽器の咆哮に隠されたりしてほとんど気がつくことがないが、オーケストラのバランスを徹底的にコントロールする指揮者によって演奏されると、まさに箱の中に隠されたおもちゃが次々と飛び出してくるような面白さに溢れるものとなる。バーメルトが繰り広げてきたこれまでの演奏を考え合わせるならば、こうした細部にまで目の行き届いた演奏となることは明らかであり、これまでに聴いたこともないような斬新なバランス感覚による「ドヴォル」が聴けるのではないかと期待は高まる。

## ■ 名花アンナ・トモワ・シントウに定期で会える!

そして、このバーメルトの個性とはおよそ正反対に位置するように思われるソリストたちの充実ぶりにも注目しておきたい。日本風に言えばバーメルトよりもちよūd一回り若いアゼルバイジャン共和国生まれのヴァイオリン奏者、ドミートリ・シトコヴェツキ(1954年生まれ)は、N響初登場の1985年から数えると、実に6回めの登場となる。近年ではシオスタコーヴィチやバルトークといった作品で骨太の解釈を聴かせてくれたが、今回演奏されるプロコフィエフの《ヴァイオリン協奏曲第1番》でも、精密に組み立てられるであろうオーケストラの音響に対し、あたかも雄渾



トモワ・シントウ

な筆さばきを見せる書家のように、大胆な演奏で対峙してくれることだろう。

また、大ベテランというべきアンナ・トモワ・シントウが、2005年7月のN響「夏」に引き続き登場するのも、往年のオペラファンにとっては見逃せない。筆者などは、カラヤンによる《ばらの騎士》でトモワ・シントウが演じた元帥夫人の映像がまぶたに焼き付いており、今回の出演でもその存在感と声の伸びやかさによって、このアーティストの偉大さを感じることができるだろう。今回取り上げるのは、シュトラウスが自分の死を目前にしながら、永遠に消え去ることのない自身の音楽の精髓をこの世にとどめた《4つの最後の歌》。歌という芸の「格」を極めた感のあるトモワ・シントウならば、この曲に込められたメッセージ、精神性といったものを、余さず伝えてくれるに違いない。

(ひろせ・だいすけ 音楽学/国際基督教大学  
非常勤講師)